

四旬節第三主日

ルカ 13・1-9

鈴木 康由（鹿児島教区司祭）

高円寺教会初ミサ

四旬節も第三主日ともなると「滅ぼされる」だの「滅びる」などと、あたかも街角の胡散臭い団体が声高に強調しそうな恐ろしげな文言に目が引かれるものです。しかし、私たちは決して恐れを感じることや怯えることなどありません。正統信仰に生きる私たちはこれらの言葉から、愛に満ちたイエス様の御言葉の真意を考えてまいりましょう。

さて、今日の福音のたとえ話に注目してみましよう。三年もの間、実をつけない無花果の木に業を煮やした主人が園丁に、切り倒してしまえ、と命じます。これに対して園丁は最善の努力をすることから、来年の実りの時まで待つて欲しい、と主人に懇願します（13・6-9）。では、もしこの無花果の木が来年もまた実をつけなかったとしたら、園丁は「それでもだめなら、切り倒してください」という約束通りにこの木を切り倒してしまうのでしょうか。おそらく、園丁は今回と同じような態度で切り倒そうとする主人を諫めることなのでしょう。つまり、この地に根を張る木の命を守ろうと努力するのです。もちろん、この園丁がイエス様を意味していることは明らかです。このことに基づいてイエス様が今日の福音の中で二度語られる「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」という言葉は考えられなければならないのです（13・3, 5）。イエス様は“滅びる”という恐怖をもって人々を煽り、それゆえに「悔い改めよ」と命じているわけではありません。園丁のたとえを用いて悔い改める必要性を訴えているのです。その必要性とは何か。なぜ私たちは悔い改める必要があるのか。その答えとなるものが第一朗読で読まれた出エジプト記と第二朗読で読まれたコリントの教会への手紙の中にあります。

第一朗読でモーセはイスラエルの民をエジプトから導き出した神と出会い、神にその名を問います。その問いに神は「わたしはある。あるという者だ」と答えます（3・14）。実に、分かるような、それでいて分からない言葉ですが、同じ言葉をご存知の通りヨハネ福音書にも用いられています（8・24, 28, 58; 13・9）。

ということは、この言葉には随分と深い哲学的・神学的意味が込められている、ということが考えられます。少し難しく思えるかもしれませんが、とても大切なことですから、考えながら聞いてください。

この世に存在するすべてのものはそれだけでは存在することはできません。たとえば、生きている生命体は生かしてくれる他の生命体・餌となるものや自然環境がなければ生きられません。また、何かが立（建）っているとしても、それを立（建）たせてくれている地面があるからこそ立（建）ていられるのです。つまり、“何かがある”ということは、他の“何かがある”ことから“ある”、即ち、存在することができるのです。これに対して神はどうか…。神は自ら存在するために他の何かを必要としません。“他の何か”がなくても存在できるのです。簡単に言えば、私たちが今ここにいるためには両親の存在が必要ですが、神様がいるために必要なものは何もないのです。ここに神様と神様以外のあらゆるものとの線引きがあります。このことに基づけば、神様はすべてのものの根源である、ということが言えます。このように、神とは他の何かを存在させるものである、という意味で、神は自らを「わたしはある。あるという者だ」とモーセに答えたのです。

さて、今話を踏まえると創造ということがはっきりとわかってきます。この世に存在するものはすべて、本来なら存在する必然性はありません。だからこそ、神様が敢えてお創りになった、ということが出来ます。しかし、その反対に、何かが存在する…誰かがいる…という理由はわかりません。強いて言うのなら、それは人間には分からないけれども神様がそのようにされた、としか答えられません。この“何かを・誰かを存在させること”を「神の愛」と表現できます。ですから、私たちは、この神様の愛ゆえに今を生きることが出来る、と言えるのです。

ところで、四旬節になると「悔い改め」とか「罪」という言葉が頻繁に聞かれますが、一体何を悔い改めなければならないのか、一体何が罪なのか、ということはあまり語られてはいないような気がします。「悔い改め」と「罪」の本質を理解するためには、人間が起こし得る最大の罪とは何か、ということを考えてみれば自ずとそれが明らかとなります。本当の罪…最大の罪とは、人を殺すといった犯罪ではありません。それは自分を愛してくれる方のその愛に反することなのです。本来、人間とは自分が愛されていることを知っているのなら、その愛に反することなどはできないはずです。だからこそ、その愛に反することが最大の罪なのです。実に罪の根源はここにあります。それゆえに、もし罪を犯したとしたら、愛してくれる方の愛に応えられなかったとしたら、当然の

ことながら愛してくれる方へ赦しを求めなければならぬのです。実に、私たち人間は、本来なら、いてもいなくてもよい存在です。しかし、神様の愛によってこの世に生まれ、今を生きているのです。ならば、「わたしはある」という神がこの世に存在させてくれた愛に反して罪を起こしてしまうことから、その愛にもう一度応えるために悔い改めが必要となるはずで

第二朗読では出エジプトを通じて荒れ野で滅ぼされた者たちの事例二つが述べられていました。一つは神の御心に適わなかった者たちです。彼らは命の拠り所である「わたしはある」という名の神…すべての存在を存在せしめる唯一の存在である神を信じることなく目に見える偶像を作り、それを自分たちの神として拝んだ者たちです。彼らには最早、目に見えるものしか信じられなかったのです。それはもしかしたら現代に於いて、我々がお金や社会的地位を宗教の如く信奉することと同じかもしれません。彼らは「滅ぼされる」というよりも自ら滅びの道を選んだという方が正確でしょう。なぜなら、「荒れ野で滅ぼされてしまいました」という日本語訳は、“荒れ野”という場所に重きが置かれていますが、原文では「荒れ野／孤独によって滅ぼされた／打ち倒された」と“荒れ野”という原因によって滅ぼされた・打ち倒された、と書かれているからです(10・5)。つまり、荒れ野で住むが如くこの世的なものを神として崇めるのであれば、それは滅び／破滅に至る道を歩むことと同じなのです。二つ目はモーセに不平を言った者が滅ぼされました。ここで注意が必要なのは「不平を言う」と訳された言葉です(10・10)。これは日本語の「不平を言う」…不満を陰でこっそりとぶつぶつと言う、ということとは違います。出エジプト記でもモーセやアロンに対してイスラエルの民が「不平を述べる」という言葉が使われますが(15・24; 16・2)、これは“責任者としての能力を強く疑う”という意味なのです。ですから、ときどき祈りの中で私たちはイエス様に不平を言っていますが、その“不平”によって滅ぼされることはありませんから安心してください。第二朗読に於いて出エジプトを通じて滅ぼされてしまった者たちの共通点は；

- ・命の与え主である神を信じることなく、他のものを神としてしまった者。
- ・旧約の時代、神の御心を告げ、永遠の命へ導こうとしたモーセとアロン。
新約の時代、私たちを神の永遠の命に導くイエス様を神の独り子として認めない者。

という点にあるのです。

改めてルカ福音書に戻ってみましょう。今日の朗読箇所では冒頭で引用したたとえ話の前で二つの歴史的事実を踏まえ、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と語られました（13・3, 5）。もうお分かりのように、イエス様は恐れを抱かせるためにこのように仰っているのではありません。また、私たちの“個々の罪”を悔い改めよ、と仰っているのでもありません。「悔い改める」とは私たちを愛してくださっている神様の愛を今一度悟り、その愛に反していることを理解した上で赦しを求めなさい、ということなのです。もし、神様の愛に反していることを悔いるのなら、園丁のたとえにあったように、イエス様は何度でも主人である神様に憐れみを請うてくれることでしょう。神を信じる者にとって忘れてはならないことが今日の三つの朗読にありました。まず、神様の愛によって私たちは生きるものとなった。それゆえにその愛に反することこそが最大の罪であり罪の根源である、ということ。次に、この世のものを神として崇めてはならない。また、この世のものに心を奪われてはならない。そして、イエス様以外には私たちを真の神へと導いてくださる方はいない、ということ。最後に、神の愛を悟り、神に立ち返ろうとするのなら私たちは決して滅びの道を決して歩まない、ということ。以上のことです。

この四旬節にあつて私たちは「悔い改める」・「回心をする」その前にこそ、私たち一人ひとりに向けられている神様の愛を考えてみましょう。そして、憐れみ深い神様の愛によって生涯が支えられていることに心を留めましょう。これらに基づいてこそ、初めて四旬節が悔い改めの時、即ち、回心の時となるのです。